

第13回群馬緩和医療研究会

日 時平成 18 年 3 月 4 日 (土)
場 所：太田市学習文化センター・視聴覚ホール
会 長：斎藤 龍生 (独立行政法人国立病院機構西群馬病院 院長)
当番世話人：澤田 俊夫 (群馬県立がんセンター 院長)

〈一般演題〉

1. 緩和ケア患者のコミュニケーション手段としてアロママッサージ導入を試みて

北爪加代子, 井田みつ江, 黒崎 公代
小林めぐみ, 木村恵理子, 中澤 仁美
伊藤 綾乃, 山川 初恵

(伊勢崎佐波医師会病院)

【はじめに】 一般病棟において, 日々の看護業務に追われ緩和ケアの対象となる患者様とコミュニケーションを図る時間が少ないという現状があり, 患者様の抱える不安や訴えを傾聴する機会を得ることが難しい. そこで, 心身の病気に補助的な効果をもたらすと言われているアロマセラピーを取り入れ, マッサージを実施することでベッドサイドでの関わりによるコミュニケーションを得ることが出来たので報告します. 【目的】 ①アロママッサージを用いてコミュニケーションを図り, 患者に関わる機会を増やす. ②血中カテコラミン3分画値でリラククス効果を検討する. 【対象及び方法】 ①緩和ケア対象患者様を中心に数種類のアロマオイルの中から好みの香りをえらんでもらい, コミュニケーションをとりながら鎖骨窩・両鼠径部・両腋窩のリンパ節の圧迫, 両下肢のマッサージを行う. ②患者様の状態が安定しているとき, または希望時に実施した. ③血中カテコラミン3分画をマッサージの前後で採血し, その変化を検討した. ④研究者7名で統一した方法で実施した. 【研究期間】平成 17 年 9 月より開始し, 現在も続行中.

2. 緩和ケアにおける看護師のタッチに関する認識

中村 純一, 永井 則子, 菊入 末子
(群馬県立がんセンター 5 病棟)

【はじめに】 今回, 死への恐怖, 孤独感により「側で手を握っていて」「ハグして」「鼻をつけて」と「タッチ」を求めてきた女性の終末期がん患者がいた. この訴えをどのように受け止めたか, またどうすればよかったかを, 男性看護師 3 名, 女性看護師 3 名で対応について意見交

換を行なったので報告する. 【結果】 「側で手を握っていて」という患者の訴えに対し, 訴えを聴いた看護師は男性看護師, 女性看護師を問わず, ベッドサイドで手を握り不安を軽減するように努めた. 「ハグして」という訴えに対し, 女性看護師の中でも実施した人と躊躇した人がいた. 男性看護師に対して「ハグして」という訴えはなかったが, もし訴えがあった場合, 3 人とも躊躇すると答えた. 「鼻をつけて」という訴えに対しては, 患者が挨拶として求めたのかもしれないが, 全員が躊躇をするという意見であった. 【結論】 今回の意見交換において「タッチ」という行為が, 看護技術であるということを再認識した. 患者自身にパーソナルスペースがあるように, 看護師にもパーソナルスペースがあり, その範囲の中に入ると躊躇してしまう. その原因として文化的背景・性差の影響が大きかった. 緩和ケアの現場では, 患者が精神的苦痛, 霊的苦痛を訴えたとき, 死への恐怖, 孤独感を軽減することが望まれる. 患者, 看護師の文化背景や性差の中で培われた, パーソナルスペースを大切にしながら看護技術としての「タッチ」を行なっていきたい.

3. 高度のリンパ浮腫を呈する患者の在宅への援助

井田維世子, 猪熊久美子, 原 真起子
永井マチ子 (伊勢崎市市民病院 5 B 病棟)
鏡 一成 (同 産婦人科)

【はじめに】 在宅で過ごす事は, 多くの患者の望みである. 今回セルフケアも困難で外泊さえも不可能かと思われた患者に対して, 本人の強い希望により, 在宅療養を目標に看護を展開した. 家族の援助, 他部門との連携により在宅医療へつなげることができた事例を経験したので, 報告する. 【事例紹介】 55 歳 女性 夫・本人 (親族なし) 肥満 身長 144cm 体重 110kg 病名: 子宮体癌手術後再発 左下肢リンパ浮腫 糖尿病 糖尿病性網膜症 【入院中の経過】 平成 8 年子宮体癌手術後は, 左下肢重度リンパ浮腫, 蜂窩織炎にて入退院を繰り返す. 今回は足背, 足趾の炎症, 疼痛で入院となる. 症状が悪化し壊死が始まるが, 糖尿病, リンパ液漏出のため切断がで